

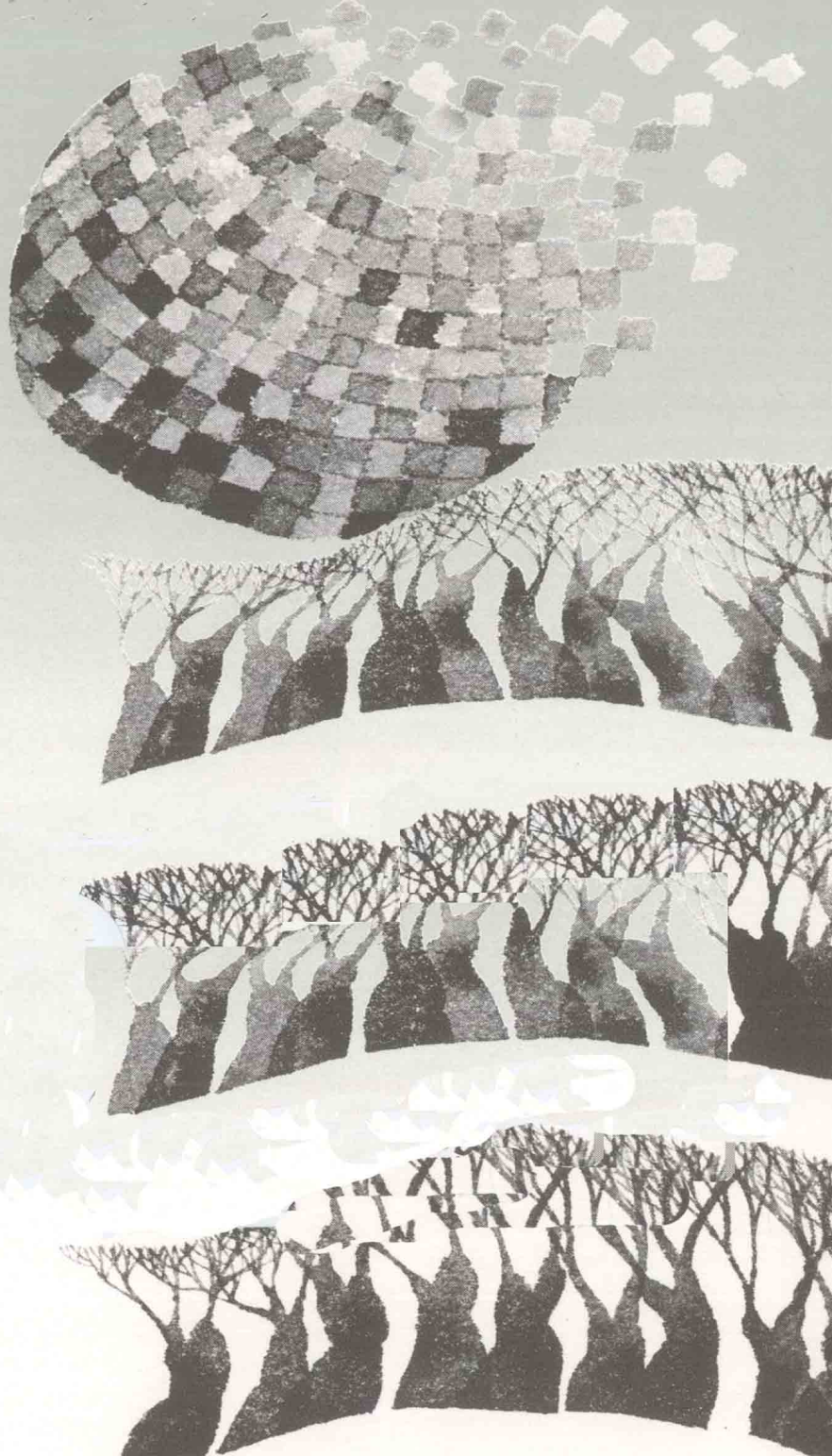
ねこでん
みどりの森は猫電通り

井上寿彦

絵つぼのひでお



みどりの森は猫電通り



井上寿彦 絵つほのひでお

913

井上寿彦

みどりの森は猫電通り

講談社 1980

181p. 22cm (児童文学創作シリーズ)

いのうえ としひこ

みどりの森は猫電通り

昭和55年10月15日 第1刷発行

定 価 980円

著 者 ^{いのうえ}井上寿彦

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©Toshihiko Inoue 1980

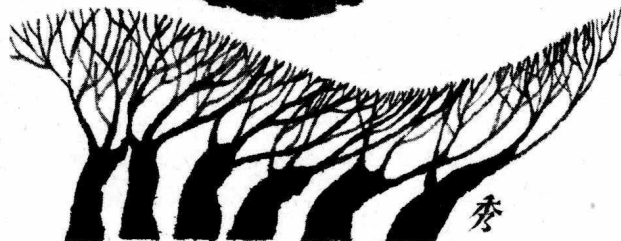
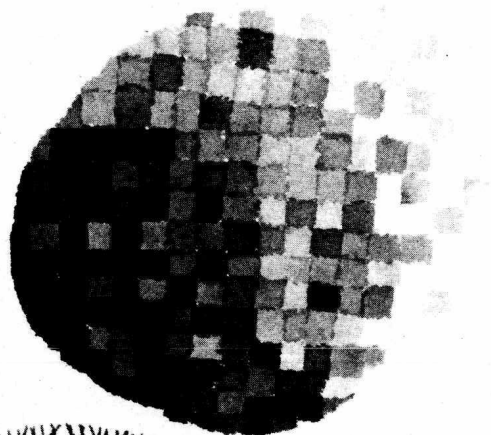
Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

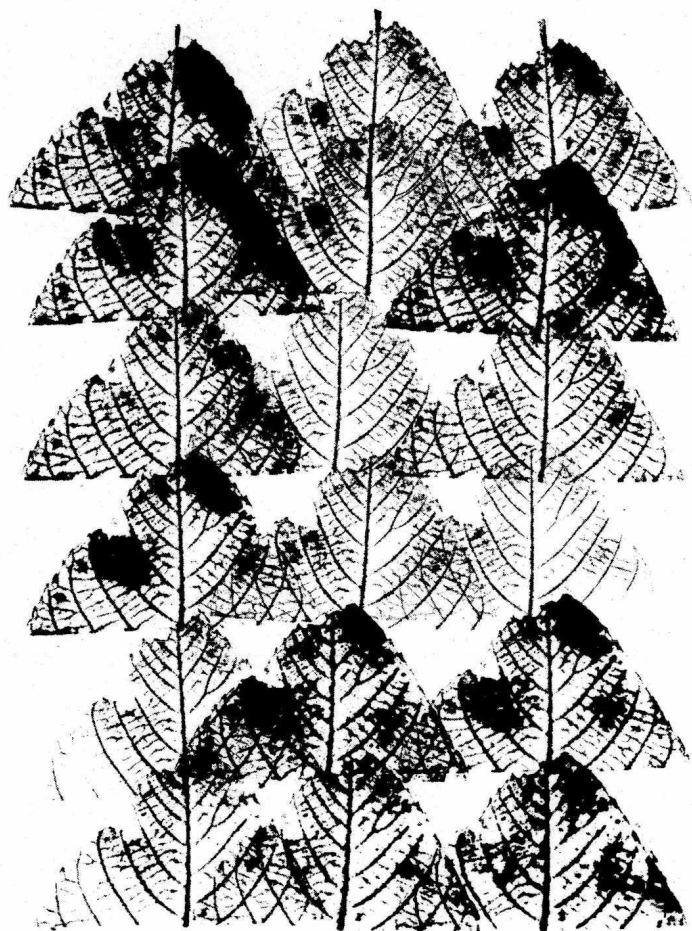
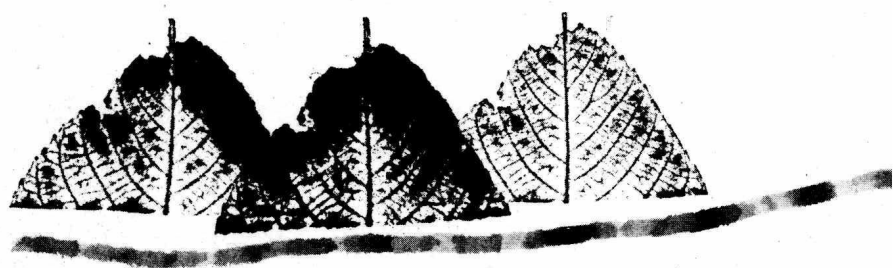
8093-190004-2253 (0)

(児一)

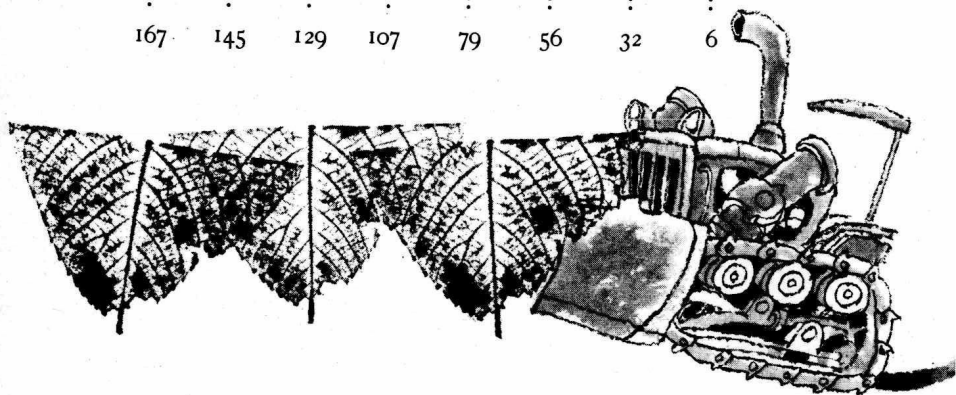
も
く
じ



秀



第一章	森に不吉な風……………	6
第二章	「詩人山脈」の小さな山……………	32
第三章	詩碑に思いをこめて……………	56
第四章	月光がこおるのか、ほたる……………	79
第五章	岩はゆうきある人のさびしい横顔……………	107
第六章	石おのをふりかざして……………	129
第七章	しずかにきえてしまった……………	145
第八章	いつも先まわりしているものは……………	167



みどりの森は猫電通り

井上寿彦 絵
つぽの ひでお



第一章

森に不吉な風

ほこりのういた町かどに、夏みかん色のまばゆい西日がさしこんで、お昼より明るい夕がただというのに、詩人の南山さんは書齋のけい光燈の下で、ううんとうなつたきり、うで組みをして考えこんでしまったのです。

つくえの上には、けさの新聞が広げられたままになっています。

南山さんは、ものを考えるときは、まぶたをとして、うで組みをするのがくせになっているのですが、ほんとうはそんな必要はないのです。

南山さんの書齋は（これも、書齋といえたとしての話ですが）、目なんかつぶらなくても、日がな一日、まっ暗やみだからです。

広さはたった二畳分、三・三平方メートル。

西がわはかべ。

東がわはとなりの洋間とのしきりのガラス戸。

その洋間も年がら年じゆう、まっ暗のどつくつ。東がわに大きな倉庫がたつたためです。

南がわにまどはあるのですが、家が境界線ぎりぎりになつてゐるものですから、南どなりにある道路工事屋さんがはんじょうして、作業場を増築してからというもの、日の光はもれてくることさえありません。

北は板戸で、げんかんとおしきりです。

こんな暗い小さいへやに一人とじこもつて、つぶらなくてもいい目をつぶつて、南山さんは、そのままゆかにしずんでいつてしまふみたいに、元氣がありません。

「おとうさんー」

板戸をドンドンドン……と、切れめなくたたいてゐるのは、小学校一年生の花子にきまつてゐます。南山さんの上のむすめです。

板戸の震動が南山さんのかた先につたわつてきます。もうとても、おちついてものを考えるところではありません。

「ノックしてから、『おはいり。』というまで、はいつてはいけません。」と教えてゐるのですが、ノックのしかたをどう教えまちがつたのか、花子は全身の力をこめてたたたくのです。

それでもたりないと思うときは、からだごとぶつけてくるのです。

「いまね、考えごとしているからね、あとで……。」

南山さんは、戸をしつかりと手でおさえてから、いいました。ひとくち口をきこうものなら、いいといわないのにおしいってくるのが、いつもの花子なのです。

「ねえ、おとうさん、あけて！　いうことがあるんだから。」

「あとできいてあげるから、ね。早くむこうへいかないと、おこるよ、ほんとに！」

「おとうさん。ほんのすこしだけ！　ねえ、ちよつとだけあけて。」

「いまはだめ。外で遊んでおいで。あとできくよ。」

「なによ、おとうさん、いいこと教えてあげようと思ったのに。」

花子は戸をはなれたようでした。

きょうは、わりかしききわけがいいなと、南山さんはまた、うで組みをして考えはじめました。

「はらたつなあ！」

こわい目つきになって、広げた新聞に目をやるのですが、もうさっきまでのような、思いつめた表情ひょうしやうはありませんでした。



ガラガラガラ……。

ゴロゴロゴロ……。

北の板戸と東のガラス戸がいっしょにあいて、

あつははは、わっははは。

きやつきやつき……。

故障したスピーカーがきんきん鳴るような、わらい声がおこったのでした。

南山さんは、あつけにとられて、二人の子どもの顔を見くらべました。花子が板戸を、次女の

里子がガラス戸をつかんで、きんきんわらいを、まだやめないでいるのでした。

南山さんは、虫歯までまる見えにして、大口をあけてわらっている二人の子どもを、にらみつ

けます。里子のほうが、

「知らないもうん。おねえちゃんにたのまれただけだもうん。うふふふ。」

「あのね、あのね、大ニースがあるというのに、おとうさん、きいてくれないんだもん。ね、

いいでしょ。『あとで。』はいや。ね、いまきいて。ね。」

強引で、おこりんぼうだけれど、陽気な花子には、つつい南山さんもまけてしまいます。

「ねえ、わたしに、あだ名かついたんだもん！　なんてあだ名か？　なんてあだ名か？」

「おたふくかぜっていうんたろう？」

「おとうさん、そればかり。ちかいますー もっと、うんといいいだ名ー」

花子は待ちきれなくて、自分からいいだしそうにしています。

「なんだろうなあ。」

「いいあだ名？」

里子はすっかりひきつけられています。

「とってもいいあだ名ー」

ねえさんのほうは、父親にむかって自信まんまんです。

チューリップ、といってやろうかな、と、南山さんが思っていると、

「ねえ、わからない？ わからない？ いってあげようか？」

「うんー」

「うん。」

おなじ「うん。」でも、里子のほうは期待で目をきらきらさせていつているのに、南山さんのほうは、早いところ、ことをかたづけ、子どもたちを追っばらおうというこんたんの、めんどろくさそうな「うん。」なのです。

「出目金ハンバークー　ねっ。いいあだ名でしょ。わたし、気にいったもんー」

「なに、それ？」

里子がきよとした顔で、問いかえします。

「知らないわ。でもいいわ、わたし。男の子がつけたのよ。」

「それだけか、用というの？」

「うんー」

花子もちよつとはすかしそうな顔をします。

「そいじゃ早く、むこうへいけ。おとうさん、いま、考えごとしてるんだから、もうきてはだめだよ。」

「なに考えてるの？」

里子のきょうみは南山さんにうつります。

「新聞を読んでいたら、たいへんなことがのつていたんだよ。」

「どんなこと？」

「おまえにはわからないことだ。早くむこうへいけー」

詩人は、もうこれ以上つきあつてはおられないと、両手両足をつかつて、北の戸と東の戸を一

度に、ボタンボタンとしました。

しばらくはしすかになりました。

トントン、トントン、トントン。

まだ一分もしないというのに、さきほどよりはひかえめに、また、ノノクをするのです。

「うるさいなあー」

いくら南山さんがこわい声でおこったつもりでも、花子のほうでは、しゃべってもらえたうれしさでいっぱいなのです。

「おとうさん、もう一つわすれてた、わすれてた。」

顔しゅうでわらいながら、花子が足からはいつてきます。

「おとうさん、あした、日曜でしょ、家にいるでしょ、森にさんぽにいこうよ。ね、やくそくよ、指切ったー、うそついたら針千本のうます。」

「指切ったー、うそついたら針千本のうます。」

小さい里子の小指までのびてきて、南山さんはむりやりやくそくをさせられてしまいます。でも南山さんはそのつもりでいたのです。いや、どうしてもあすは森へいってみようと思っていたのです。

「さあ、早く、早く。おとうさん、早くいこうよ。」

花子が、もちまえのきんきん声をはりあげて、表の通りからよんでいます。リンリン自転車のベルを鳴らしつつつけているのは、里子のほうでしょう。

南山さんは運動ぐつをはいてでてきました。

「おい、おい、『むかいのからすが、またさわぐ。』といわれるぞ。」
と、花子をたしなめます。

おむかいには、口のうるさい糸屋のおばさんがすんでいて、

「からすが鳴いたか、がちようがさわぐか……」と思ったら、また花子ちゃん……。」
などと、もうなんべんもやられているからです。

このおばさんは、むかしから放送局とよばれた、大のおしゃべりおばさんなのです。

ピンクの自転車にまたがった花子は、白いセーターに、短い紺色のスカートをはいています。

どんなに寒くても、花子はズボンをはかないのです。寒くない、寒くないといつては、むきだしの足に鳥はだをたてて、すぐストーブにかしりつくものですから、おかあさんとの親子げんかがないひと冬でした。

でももう三月。寒いのも朝のうちだけでしょう。